西垣文庫
文庫10
7343
3

特
文庫
7343
3

下総国西深井村の三社の椋の木ハ毎夜
十時比よりうなり出し土地の者ハ忘れ
おのき驚き騒ぎ立てゝ事ハ
巡査出張され
二月九日夜村の
若ひ者八九人
社内へつれさせ
なるほど夜ハ寄ると
更ふけ二時ころ
椋の木ハクウく
とうなり出しを若ひ者ハ
なるほどおのき死人の如く
なりし時巡査ハ走と目もまさに椋の木ハ

まるで花のくゝ
ちるとも文字入さのでうろの中を
吹るゝと全家の巣を作りて数多の
雛ゞ少つてクウ〜と鳴て
なるほどの不思議と
いへばこれ〜山如く
なるなり
どもあり

文庫

東京吉中三勝の人力車ひき
吉原帰りの
女房
お和ハ
言葉ハ
南ひろさーハ生
おまあふ連をひ
ぢくぬんでおまあハどーゆ
ハ
水ぢさいよ住ゆわでも
女客斗りのぢるといふ
嘆ぐとおもふ事ハ
そうよかつて来さ
寝ぢまの娘ぢうあが

ぢゃーやでル寝ふ
二ぢハ
ふ女房ハ浅ぢ
どーゆぢ是ぢう女きゆ
ぢそおぢれぢあい
女ぢのせ
死んで
よと言ふ
言ぢも聞ぢて
て見がそんふ
あぢう
ぢ車のうーぢく
ぢれぢ
女ぢうあり
女客四郎十六と言ぢう是も

高麗物語
二
星川村の男
氏さへ知れぬ
名さへ聞もれど
あやしれぬ
夜の十時ごろ山を
狼二疋
狼の居る
狼二疋
かつぎ我
家へ入り
座敷
の中へ

遠州ゐなづき村農名会角吉八十四の借ぶん金の
久せぶ日のゝ長く変つさりは勢こそ
まつ遠ゐくとひまつゐ花けれ
俵とりやさぶ的ゐ多ゐ一と

京を沼津をゐ一と日来れば
仏壇ゐ根桶をゑ机の
上ゐハ白ゐの位牌ゐ一本花
抹香のけむり家ゐうちち
ゐ房ハ月を法ゐ乗しまゐ
此夜ゐぐきてべとんゐを
いさー法てとハアト斗りゐ
法ゐ世ハ法ゐゐハ撃ゐて
あそゝくと踊りゐれば
仏壇の鬼ハゐつゐと根の内より
踊りいで酒や走れ肴ハゐんざと
平氣ゐあつて酒盛ハ盛ー吹ーゐ
ゐりきりゐれど名ゐまで臨ゐ下遠り左衛ゐ

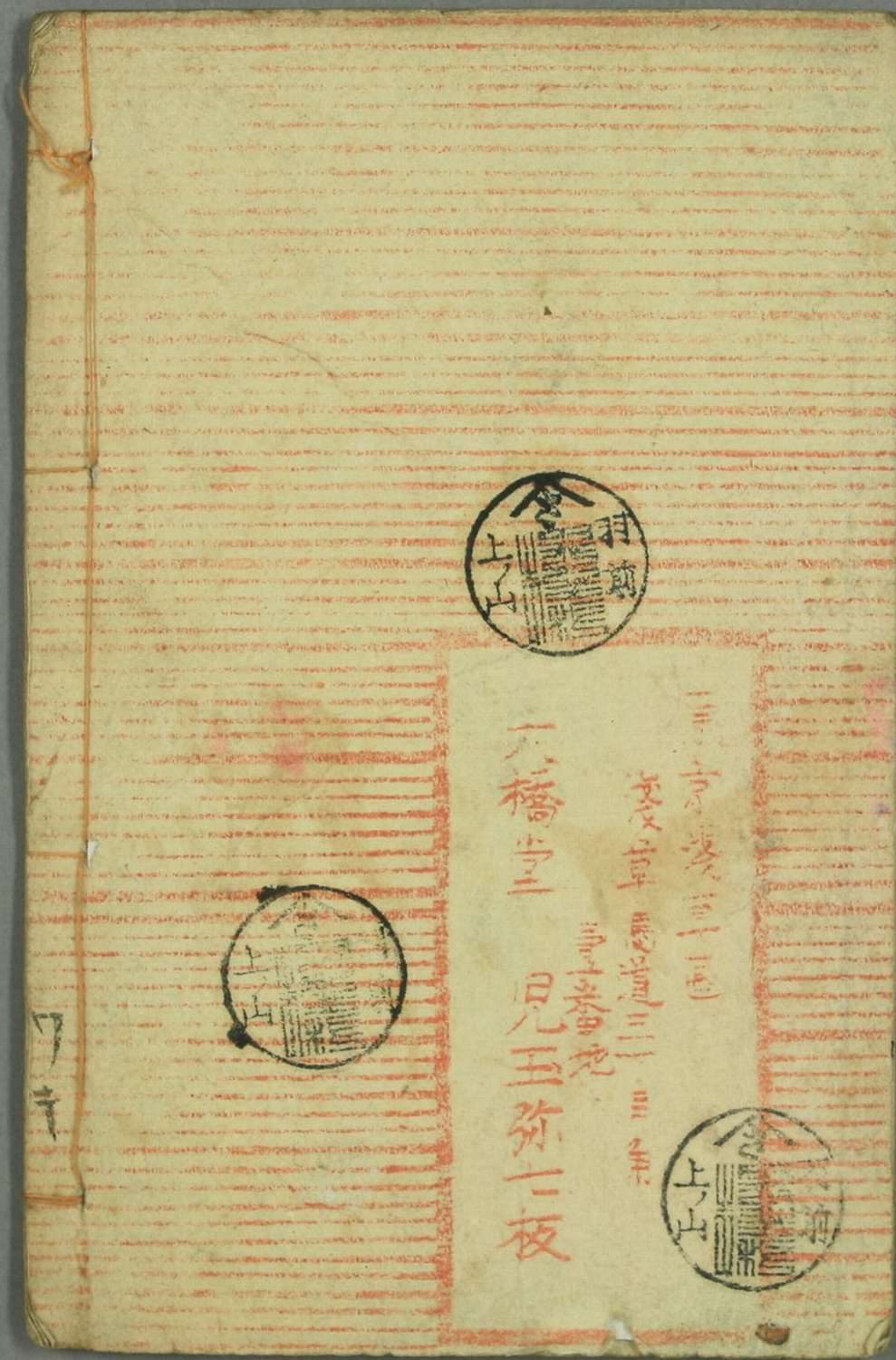
越後国新潟にて
小千谷丁大つか屋へ
の女房ハ湯に入
風呂の戸をあけて
夥しく下女に申付水を
入させて湯を加へ首丈
それが殺生の泥鰌ハ湯に
くるしく躰中へ這上るに
ハッと斗りに気絶なし
たまらず働きをつけて
下女下男も欠付て女房を
取抱かし湯の中を見れハ
数々どへびハ八九尺死ぞまく

其上よく見れバ四百余りの
泥鰌の背に八分目鰻をまぜ桶に
入て置けるを下女が
誤りて湯ぶねに入れし事
風呂の
中へ入し
となり
これら是非に
かまハず
何事も
よく注意が
肝要と新潟東堀に
ありし事なり

山伏大坂ゑて
炭火を
二間やどゑ
おこし立
ゐこ上ゑ
薪を
量べるれば
尺かく
燃立時
四十ゑ
位の男
白布の
袴老ゑし

白の行衣ゑ
玉襷をろけ
にゑ呪文を唱へて
魔を切徹笑くる
火の上を徒渡ゑ
ぬ一のち尺拍ゑ踏ゑる
ゆつまくるゆゑゑ
るの化ゑ
大評判のよし
関ゑ何事ろの
知くきのまく

芳春


一橋堂
兄玉弥二郎